

再び流域へ ー近代からポスト近代へー

(財)リバーフロント整備センター 理事長 竹村公太郎



江戸の流域の封建社会へ

日本列島は地球上で特徴的な地形をしている。ユーラシア大陸の極東に浮かぶ列島中央には脊梁山脈が走り、日本海と太平洋に向かって無数の川が流れ下っている。細長い日本列島の土地は、この海峡と山々と川で分断され存在している。

約3000年前、日本人たちはこの分断されている盆地や沖積平野に住みつき、稲作を開始した。

16世紀の長い戦乱の後、平和が訪れた。江戸幕府に恭順の意を示し、覇権を露わにしなければ、大名は地方の権力者として君臨できた。江戸幕府の長期幕藩封建制度の継続は、参勤交代やお手伝普請や藩の取り潰しなど政治社会的側面で論じられる。しかし、それ以上に、江戸幕府は巧みな工夫を凝らしていた。

江戸幕府は、日本列島の地形を利用し、流域の尾根を越えない土地に即して各大名の領地とした。大名たちは与えられた流域内で、洪水を防ぎ、干拓をして、川から水を引き、農地開発をした。開発は流域内で行われ、尾根を越えなかったので隣国との衝突はなかった。

流域の中で人々は自然の恵みを享受し、モノを再利用する循環社会を形成していった。

世界史の中でも確たる流域主義の封建社会が、極東の島国で誕生したのだ。

流域の崩壊の中央集権へ

19世紀、欧米列国が日本に迫り、日本は植民地になるか帝国になるかの選択に迫られた。日本は帝国の道を選択した。富の集積がなく、近代技術で遅れていた日本は、一刻も早く欧米列国に追いつかなければならなかった。

そのためには、地方権力が林立する封建社会から、中央に権限と富を集中させた国民国家に脱皮しなければならなかった。地方封建から中央集権への脱皮は、明治新政府にとって最も重い政治課題となった。

日本の封建社会は根深かった。何しろ流域に即した地方権力は自然であり、人々の住まい方も自然そのものであった。流域主義の封建社会を覆すのは、並大抵の力では達成できなかった。

これを思わぬ形で実現した人間が現われた。それは、大隈重信と伊藤博文であった。彼らは近代化のため鉄道の必要性を主張した。鉄道建設には膨大な資金が必要であり政府内で大反対を受けたが、英国の技術と資金を導入して実現した。

明治5年、新橋と横浜の間を蒸気機関車が走った。蒸気機関車は新橋、横浜間をたった1時間で結び、行き来の障害だった多摩川や鶴見川もあっけなく越えてしまった。

明治の指導者たちは、この鉄道の衝撃性を一瞬にして理解した。政府はその後の鉄道建設の投資を惜しまなかった。明治22年に新橋から神戸が開通、明治24年に上野から青森が開通した。新橋、横浜間の開業からわずか30年余りで、鉄道網は北海道から九州まで7000 km を突破した。

江戸の封建社会を支えた流域は、鉄道によって横に串刺しにされた。蒸気機関車を目の当たりにした人々は、自分たちを流域に封じ込める時代は終わったことを悟った。日本各地の人材と資金が鉄道に乗って東京へ、東京へと集中していった。

日本の封建社会から中央集権の国民国家への大変身は、世界から奇跡と言われるほど一気に進んだ。日本人は流域の生活に別れを告げ、化石エネルギーによる大量消費の近代文明に突入していった。

近代文明の限界

国内に石炭を保有していた日本は、世界最後の帝国に滑り込んでいった。20世紀前半、いくつかの戦争に勝ったが、石炭に次ぐエネルギー・石油の争奪戦の第2次世界大戦で負けた。

戦後、日本は武力による戦いを封じ、世界各地の紛争を尻目に、中近東の余りある石油を利用して世界最先端の工業国家に躍り出ていった。

20世紀の後半、先進国は消費を謳歌し、中国などのBRICsが台頭し、途上国のアジア・アフリカは人口増加を示し始めた。

ところが、21世紀に入ると、地球が悲鳴のような軋み音を上げ出してきた。きしみ音は、地球規模の気候変動であり環境悪化であり資源逼迫であった。

世界各地で豪雨や高潮はますます凶暴化し、氷河や雪が消失し、大干ばつが頻発しだした。

地球規模で環境が悪化し、森林が失われ、大地は砂漠化し、海域汚染が進展した。

資源の逼迫も顕在化し、食糧増産を支えた化学肥料のリン鉱石はピークを終え減少傾向に入り、石油価格も高騰し人々を脅かしていった。

ポスト近代は再び持続可能な流域へ

20世紀文明は、地球資源を一方的に収奪し、地球規模の気候変動、環境悪化、資源制約を招いた。

この文明は持続可能でないことは誰の目にも明らかになり、ポスト・近代は、いかに持続可能な社会を構築していくかになった。

持続可能な社会は、自然資源を一方的に収奪するのではなく、自然資源を永続的に享受するものとなる。すなわち、自然環境を保全し、自然環境を回復し、生態系サービスを楽しむ流域社会である。

水力などの太陽エネルギーを利用し、暗い山林を再生し、大地を緑化し、汚泥を再利用し、河川・湖沼や海域の環境を保全し再生させる。

この持続可能な流域は、ポスト近代の日本の方向であり、アジア・アフリカのプレ・近代の途上国の方向でもある。

21世紀の今、近代の先頭を駆け抜けた日本は、近代という円周を一周回り、一周遅れの途上国と並んだことになった。

ポスト・近代の日本は「生態系サービスの持続可能な流域」という目標で、プレ・近代の途上国と横に並び連携していくことになる。